

日本体育学会  
体育哲学専門領域

# 会報

Vol.24(2), July 2020

## 記事

- ▷ 巻頭言
- ▷ 体育哲学考
- ▷ 海外情報紹介
- ▷ 私の研究
- ▷ 定例研究会報告
- ▷ 運営委員会
- ▷ 事務局より
- ▷ 次号予告!

## 巻頭言

### コロナ時代の大学体育

小林勝法（文教大学）

新型コロナウイルス感染症の拡大によって、従来の学校活動や体育ができなくなった時、私たちはその本質について改めて考えざるを得なくなった。同じことは1991年の大学設置基準大綱化に向けた議論の際にも起きた。体育科目の存続が危うくなり、その存立根拠や意義について、日本体育学会や全国大学体育連合でも盛んに議論された。この時は2年ほどかけてじっくり議論できたが、今回は時々刻々と状況が悪化する中、次々と対応に迫られ、本質的な問いに答える間もなく、今に至っているという大学がほとんどではないだろうか。この間の各大学や教員の対応を振り返ることは、体育の本質に新たな角度から切り込むことになるだろう。本専門領域でも議論を進めて欲しいと思うが、ひとまずは、編集者の求めに応じ、恥を忍んで私の経験を述べさせていただく。何かの参考になれば幸いである。ただし、本質に関する論考ではなく、運営のドタバタ劇である。

誰もが経験したことのない非常事態に直面したとき、その対応の仕方がいかんで私たちは2種類に分かれる。ただ呆然と立ちすくみ過去を思い出して嘆いているか、少しでも前に進もうと可能性を追求するか、そのどちらかである。そして、衰退か飛躍のどちらかに帰結する。この数ヶ月、この明暗を分ける光景を幾度となく見てきた。大学体育がコロナ危機を乗り越え、チャンスを活かし飛躍できるか、この数ヶ月が勝負の時である。

かく言う私もコロナ禍をチャンスと認識し、それを活かす取り組みを始めるまで時間を要した。3月上旬に春学期の授業開始を遅らせる決定がなされたが、そのときは感染が収束するまで待って、通常通りの内容と方法で行うという認識であった。その後、2回、授業開始が延期されたのであるが、授業開始後の4回はオンラインで行い、その後は対面で行うという見通しであった。この間、体育実技を非開講にしたり、秋学期に移動させたりする可能性について、同僚と議論を交わした。オンラインでは教育効果も学生の受講満足感も期待できないので、授業準備にもモチベーションが上がらなかった。全国大学体育連合の調査（4月上旬実施、48大学回答）では、非開講や秋学期移動が約1割、講義へ変更が約3割であると知り、そのような大学をうらやましく思ったりした。

しかし、いよいよ開講日が迫り、授業準備に取りかかったときに、外出自粛で長く閉じこもっていた学生の状況が心配になった。しかも、新入生はまだ一度もキャンパスに足を運んだことがなく、顔見知りもない状況で、孤独に授業を受けなければならない。このような

学生のニーズを把握し、適切な教育をすることの重要性に気がついた。他大学も同じ状況であろうから、全国の大学に呼びかけて、学生の実態調査をすることにした。全国の13大学の協力を得て、約3,000人の学生の回答を集計できたが、この調査は学術的な意義よりもまずは各大学で受講生の実態を把握することを促すことであった。調査の中間報告（約2,200人回答）では、外出自粛期間中に約半数が運動を全くしておらず、ストレスを感じている学生は約6割であった。

このような学生の実態を知ってからは、体育実技を非開講にしたり講義に切り替えたりしたのは果たして良かったのか、疑問に思うようになった。オンライン体育実技では多くの大学の教員が苦勞して教材作りをし、様々な工夫のもと授業をしている。この経験が大学体育の飛躍へとつながっている。そこで、飛躍への取り組みを推進するために、WEBセミナー「コロナ時代の大学体育」を6月中旬に開催した。8月8日には「オンライン体育実技のティーチングティップス」を開催し、授業実践の交流をする。私は、「オンライン体育実技の意義」について発表するので、是非ご参加いただき、ご批判を頂戴したい。

小林勝法 ([kappo@bunkyo.ac.jp](mailto:kappo@bunkyo.ac.jp))

## 体育哲学考

### スポーツのテクノロジー化と神話化

河野清司（至学館大学）

今回の新型コロナウイルスはスポーツにも大きな影響を与えています。2020年東京オリンピックだけでなく、鹿児島で予定されていた第75回国民体育大会も延期となっています。このオリンピックや国体を含め、本稿では、文化としてのスポーツについて考察する際の視点について3つの点から論じていくことにします。

まずは、認識のスポーツ化です。「われわれの身体には無限の能力が隠されている」という言葉を耳にすることがあります。そのような漠然とした力(X)を想定することはできませんが、それ自体を知ることは不可能です。ただし、その一部であれば、知ることができます。例えば、「最も速く走る能力」は陸上競技100m走というゲーム形式での競い合いの結果、立ち現れることとなります。オリンピックの勝者には「世界最速」という称号が与えられますが、そのことは、このゲーム形式での勝者がその時点における世界最速の人間であるという枠組みがわれわれの中に形成されており、その枠組みの中で競技や選手をわれわれがみていることを示しています。

つぎに、スポーツのテクノロジー化です。記録の更新を可能にしているのは運動フォームおよび用具の改善・改良です。スポーツの用具や場は、その時点での最新テクノロジーを取り入れることにより、変化を遂げています。その一つが「サーフェイス」であり、陸上競技ではトラックが専用のサーフェイスです。北村はこの変化について論じています（北岡哲子『スポーツをテクノロジーする トップアスリートの記録を引き出した技術の力』日経BP社）。1964年東京オリンピックのトラックはアンツーカーでしたが、その後、さらなる記録更新のためには新たな素材が必要でした。そこで登場したのが、1968年に米国3M社によって製造されたウレタン舗装材の「タータン」であり、1968年メキシコオリンピックで採用されました。このように、スポーツは最新テクノロジーを利用しながら進化していますが、その一方、IAAF（国際陸上競技連盟）は1999年から全天候舗装材の品質規格を制定し、認証制度を開始しています。さらに、選手の感性を重視し、サーフェイス表面の仕上げ（トッピング）方法として、「エンボス（ノンストップ）仕上げ工法」が開発されており、その結果、新設時から表面のトッピングを摩耗した状態にしているようです。このような北岡の記述から、スポーツは更なる記録を可能にするテクノロジーを採用する一方、選手の安全性と感性

の面からテクノロジー化に対する規制をしていることが理解されます。

最後にスポーツの神話化です。この例証として、「聖矛継走」があります。これは、1940年の「幻となった東京オリンピックを記憶したものであったと考えられる」のです（浜田幸絵『〈東京オリンピック〉の誕生 1940年から2020年へ』吉川弘文館、110頁）。それと同時に、この継走は1964年東京オリンピックの「聖火リレーの原型」をなしています（吉見俊哉『五輪と戦後 上演としての東京オリンピック』河出書房新社、121頁）。浜田はこの「聖矛継走」を詳細に論じています（前掲、浜田）。この継走は1938年11月4日から6日まで、日本陸上競技連盟主催、文部省・厚生省後援で行われました。伊勢神宮に最初の矛を奉納した後、リレーはスタートし、三重の結城神社、愛知の熱田神宮、静岡の三島神社、神奈川の鶴岡八幡宮、東京の靖国神社と明治神宮に矛を一本ずつ奉納し戦勝を祈願しました。最後の矛は、外苑競技場で秩父宮が出席して行われていた国民精神作興体育大会の閉会式の演出にも使われました。この大会は、オリンピック返上の時局にそった「国民体育」のイベントとして大日本体育協会が主催したもので、聖矛継走は、この体育大会を神聖化する儀式となつたとされています。このような浜田の記述から、聖なる祭具を継走するという身体の活動によって、「国家的に神聖なものを隣接する地域社会へと次々に継受していく（同書、109頁）」ことにより、共同体および大会の聖化が日本における国家の神話として機能していると考えられます。

以上のように、スポーツはわれわれの認識を規定する形式として機能している一方、それを体現する用具や場はテクノロジーの採用と規制によって変化しています。さらに、テクノロジー化のベクトルとは反対に、聖なるものと身体の活動が結合することにより、スポーツは国家の神話として作用しています。

河野清司 ([konok@sgk.ac.jp](mailto:konok@sgk.ac.jp))

## 海外情報紹介

### OECD の Education 2030 について

近藤智靖（日本体育大学）

OECD（経済協力開発機構）は教育を中心とした政策評価についての事業を積極的に展開しており、各国に大きな影響を与える存在となっている。たとえばPISA（国際学習到達度調査）やTALIS（国際教員指導環境調査）は、我が国のカリキュラムや教員の働き方改革の指針にもなっている。また、OECDは1997～2003年にかけて、教育で育成していくべき資質・能力を特定するDeSeCo（デセコ）プロジェクトも進めてきた経緯があり、各国のカリキュラム策定への提言をし続けている。そのOECDの新たな動きの一つとして、2030年を目途としたEducation 2030（以下、E2030）プロジェクトがある。

OECDは、世界経済のグローバル化や先行きの見通せない社会の在り方に関わり、各国がカリキュラム等を策定していくための参考となるプラットフォームづくりに取り組もうとしている。我が国もこのプロジェクトに参加しており、文部科学省初等中等教育局と、東京大学や東京学芸大学を中心とした有識者が主な構成メンバーとなっている。

E2030では、2015～2019年までを第一段階と定めており、教育において育成すべき資質・能力の見直しや目標についての議論をしてきた。この第一段階は、Learning Compass（ラーニング・コンパス）（学びの羅針盤）としてまとめられている。Learning Compassは、子どもや社会のWell-being（ウェルビーイング）を促進していく上で、教育の中でどのような資質・能力等を大切にしていすべきかについて、総合的な指針を示している。特筆すべきは、Agency（エージェンシー）という新たな概念を示している点である。Agencyとは、「自ら考え、主体的に行動して、責任を持って社会変革を実現していく力」と捉えられており、子ども一人一人が前向きな態度で学習に取り組むといった意味に留まらず、責任を持って社会

変革を実現することを志向した能力の育成を目指している。詳細は、報告書の仮訳を Web 上でも見られるので、文献 1 の PDF を参照頂きたい。

また、E2030 では、体育（保健を含む）と数学という二つの教科のカリキュラムを分析し、どのような目標等を重視しているのかについての調査を実施している。筆者も、2017 年より体育のアカデミックエキスパートの一員として我が国の体育科教育政策の現状等を報告してきた。下記の文献 2 の報告書では、各国の体育は何を目標としてきたのか、また、過去や現在を踏まえ、どのような未来を描くことが大切であるのかについて示している。現在、E2030 は第二段階に入っており、教員養成等についての分析も始まっている。各論が出てくるのは、今後である。

筆者は、OECD の会議に何度か参加しているが、毎回、グループワークが長時間にわたって盛り込まれており、参加者一人一人の意見表明の機会が十分に保証されている。「Learning Compass」「体育の報告書」のいずれも、著名で権威的な有識者が作成したと言うよりも、参加者一人一人が「ああでもないこうでもない」と試行錯誤を繰り返した結果であり、こうした OECD の会議の進め方や報告書の作り方には学ぶべき点があると考えている。まさに Agency の考え方を体現しようとする OECD 関係者の姿勢を、我が国の教育関係者も参考にする必要があると感じている。

<文献 1> 「OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」

[http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-](http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf)

[2030/OECD\\_LEARNING\\_COMPASS\\_2030\\_Concept\\_note\\_Japanese.pdf](http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf)（参照日 2020 年 7 月 12 日）

<文献 2> OECD Future of Education and Skills 2030 「Making Physical Education Dynamic and Inclusive for 2030」

[https://www.oecd.org/education/2030-](https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/OECD_FUTURE_OF_EDUCATION_2030_MAKING_PHYSICAL_DYNAMIC_AND_INCLUSIVE_FOR_2030.pdf)

[project/contact/OECD\\_FUTURE\\_OF\\_EDUCATION\\_2030\\_MAKING\\_PHYSICAL\\_DYNAMIC\\_AND\\_INCLUSIVE\\_FOR\\_2030.pdf](https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/OECD_FUTURE_OF_EDUCATION_2030_MAKING_PHYSICAL_DYNAMIC_AND_INCLUSIVE_FOR_2030.pdf)（参照日 2020 年 7 月 12 日）

近藤智靖（[kondohtomoyasu@nittai.ac.jp](mailto:kondohtomoyasu@nittai.ac.jp)）

## 私の研究

### 私の哲学することの原点：博士後期課程のあとがきにかえて

高尾尚平（日本体育大学）

昔から「あとがき」が好きでした。「あとがき」には、著者へ筆を執らせた生の痕跡が残されている気がするからです。ことさら、哲学にかかわる書物の「あとがき」には、その人の哲学することの原点がありありと綴られています。客体化された思考をふたたび「私の研究」として手繰り寄せるためには、自身の哲学することの原点を語りなおす場が必要となるのかもしれない。

もともと、哲学することの原点そのものは、人が主体的に手繰り寄せるものとはかぎりません。K.ヤスパースは、人間を襲う衝撃が人を哲学することへ向かわせるといいます。人間を襲う衝撃とは、生に対する驚きや疑い、自己喪失の念などです。E.レヴィナスもまた、似たようなことをいっています。とあるラジオ放送のうちでレヴィナスは、哲学的思考が「言葉という形ではおよそ表現しえないような外傷や手探りから始まる」と語っています。哲学することの原点は、人が主体的に手繰り寄せるものではなく、不意にその人へ訪れるものなのかもしれません。

私の哲学することの原点もまた、いま思い返してみると不意に出来してきた気がします。私の哲学することの原点は、バスケットボールの指導に熱中した大学時代にあります。本稿では、私の研究内容に触れつつも、主に私の哲学することの原点を辿りなおしてゆきたいと思えます。このことにより、学術の文脈においてではなく生の問題として「私の研究」をとらえ返すことが、本稿のねらいとするところです。

私はスポーツ指導における暴力について研究してきました。この研究テーマのもとで問われたのは、①暴力はスポーツ指導のうちでいかなる意味や影響力を担うのか、②暴力はスポーツ科学の活用により克服可能なものであるのか、③ことばのコミュニケーションの充実が暴力の克服にいかん資するのか、④暴力を克服してゆくためにはどのような指導が求められるのか、という4点でした。

私が暴力を研究テーマに選んだ背景には、2012年に社会問題となった桜宮高校の暴力事件が影響しています。私は当時、教師を目指して日本体育大学で学ぶかわら、母校の法政大学第二高等学校でバスケットボールの指導に携わっていました。いわば高校バスケットボール界の内部にいた私にとって、この事件は衝撃的な出来事でした。

桜宮高校の一件が私に与えた衝撃は2つの面を持っています。1つは、暴力の恐ろしさを私に痛感させたことです。当時の私は、おそらく、暴力の恐ろしさを本当は知らないのに知っているつもりになっていたのだと思います。いま1つの衝撃は、この事件に対する世論への疑念でした。足並みをそろえるように各所（某体育系大学も含む）で発せられた反暴力の宣言は、当時の私にとっていささか「手のひら返し」のように思えました——私たちは、暗黙裡に運動部活動の指導へ過剰な厳しさを期待し、それを黙認していたのではなかったのかと。「じゃあどうすればいいんだ」。そんな声が多く指導者から聞こえてきました。

「じゃあどうすればいいんだ」に答えることは、いつしか、「私の研究」となっていました。教師になるための勉強として大学院へ進学したはずが、暴力の問題が頭から離れず、「じゃあどうすればいいんだ」への応答に一心不乱になってしまった次第です。したがってこういってよければ、「私の研究」は、バスケットボールを介して出会ってきた指導者の方々への応答として紡ぎだされています。

紆余曲折を経てこの応答は、ひとまずの区切りをむかえました。私は、『スポーツ指導における暴力とその超克に関する哲学的探究：選手の向け変えをめぐる所論』と題する博士学位論文を執筆し、2020年3月に博士後期課程を修了しました。現在は僥倖に恵まれ、日本体育大学の任期制教員として働いております。

暴力の研究は、しかし困ったもので、私を望外の地点へ連れまわし続けます。「じゃあどうすればいいんだ」への応答が問いを根源へ引き戻し、私を新たな哲学することの原点へ連れてゆきます。そういうわけで、博士後期課程は修了したものの、「博士後期後期課程」のような日々を過ごしている次第です（もちろん、職務第一で！）。

高尾尚平 (s-takao@nittai.ac.jp)

## 定例研究会報告

### 2020年度第一回定例研究会報告

水島徳彦（東海大学大学院）

世界的に猛威を奮っているCOVID-19の災禍の中、現在、様々な生活様式の変容や新たな価値観など手探りの日々が続いています。大学や研究活動も例に漏れず、従来の活動が制限される状況が続いています。そのような時世の中、今回、これまでになかったオンラインという新たな方式で、7月11日に定例研究会が開催されました。このような貴重な研究発表の場を設けていただいた専門領域の各先生や、会の運営を手配して下さった森田先生にこの場を借りまして、心より御礼申し上げます。また、COVID-19においては予断を許さない状況が続くと予想されますが、今後の研究会の開催について言及された関根先生の心強いご挨拶にも大変、励まされた思いでした。

今回の定例研究会は学位論文の発表、若手研究委員会の活動報告や大学院生の研究発表など計五演題の発表がありました。私も修士論文の一部内容を発表しましたが、いずれの発表も、私の知見を新たな領野へ拡げるものであり、大変勉強になりました。会の進行としま

しては、大雑把に述べますと、オンラインにアップロードされた発表者の資料を各自で読み、その後発表への質問の受付がされ、そちらに各発表者が文書で回答するという流れでした。

口頭発表という従来の形式と異なり、発表者の用意した資料を読むという形式で進行した会の序盤、各発表者の先生の資料を自身の思考の往復の中で何度も読み直したり、分からない言葉を調べてみたりと、対面方式ではない発表のメリットを感じられる時間でした。しかし、その後の質問の受付において、発表者の先生に教えていただきたい点もありましたが、今回、私は質問をすることができませんでした。この点については、私事ではありますが、議論の拡充に貢献することができず、毎度、研究会の折に反省させられている点で、今後の私自身の課題と痛感しています。その後、発表者は質問への回答を文書にて書き起こすという作業がありました。幸にして、拙稿にも新たな示唆を与えてくださる内容や、自身の研究の立ち位置を再確認させられる内容、激励のお言葉など四人の先生からご質問をいただくことができました。上手く回答できたかはわかりませんが、精一杯回答させていただきました。

しかし、ここではオンラインのメリットとデメリット両面があったように思います。メリットとしては、私の力不足に起因することではありますが、回答するための時間が従来の形式より多いため、思考を整理することができた点です。デメリットとしては、私の回答に対して、質問をいただいた先生の反応を伺うことができないという点です。オンラインという制限がある中での議論ですので、致し方ないことではありますが、議論には双方向性が重要なのだと改めて思い至らされ、これまでの「当たり前」のありがたさに気づかされました。この点については、これまでの研究会では、休憩中に一息つきながら意見交換を気さくに行う時間や、研究会後の懇親会で様々な先生とお話することで多くの刺激を受けていた時間も、私にとってかけがえのないものとなっていたようです。

今回のオンライン形式での定例研究会では、研究発表以外に、多くの気づきを得ることができました。その多くは、これまで「当たり前」のものと思っていたもので、あまり気にかけることもなく日々、享受していたものでした。体育哲学という一つの専門領域に集った方々と過ごすことができる貴重な時間に、改めて感謝の念を抱きながら、今後の研究生活に精進して参りたいと思います。逼迫した状況が続いておりますが、本領域に集う皆様のご健康を祈念しまして、結びとさせていただきます。

水島徳彦 (m.benta1018@gmail.com)

## 運営委員会より

2020年9月から10月にかけて、2021・22年度運営委員選挙を実施しますので投票をお願いいたします。また、2020年度の専門領域総会を12月に開催いたします。開催方法を含め詳細については改めて周知いたします。

## 事務局より

高岡英氣（敬愛大学）

### ○2020 横浜スポーツ学術会議について

新型コロナウイルス感染症の影響により「2020 横浜スポーツ学術会議」は Web 開催となりました。開催期間は2020年9月8日（火）から22日（火）までとなります。詳細は公式HPをご確認ください。

公式HP：[https://yokohama2020.jp/jp/index\\_jp.html](https://yokohama2020.jp/jp/index_jp.html)

### ○定例研究会

2020年度「第2回定例研究会」：2020年12月初旬を予定

2020年度「第3回定例研究会」：2021年3月初旬を予定

詳しくはメーリングリストおよびHPでお知らせします。

### ○住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、事務局（[bureau@pdpe.jp](mailto:bureau@pdpe.jp)）までご一報ください。また、メーリングリストに登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。こちらも事務局（[bureau@pdpe.jp](mailto:bureau@pdpe.jp)）までご一報ください。

## 次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下されます方は、広報担当：田井（[tai@gunma-u.ac.jp](mailto:tai@gunma-u.ac.jp)）までお問い合わせ下さい。

.....

## 体育哲学専門領域会報第24巻第2号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域

関根正美（代表）

編集者 田井健太郎、佐々木 究、阿部悟郎（広報担当）

発行日 令和2年7月29日

連絡先 〒263-8588

千葉県千葉市稲毛区穴川1-5-21

敬愛大学経済学部 高岡英氣 気付

電話：043-251-6363（代表）

## 【編集後記】

上橋菜穂子氏が日本文化人類学会の学会賞を受賞された。『精霊の守り人』などで知られるファンタジー作家であり、本会報でも昨年「書籍紹介」欄で採り上げられたので、未読でも名前くらいはご存じという方も多いかと思う。

そもそも上橋氏は博士号を取得した文化人類学の研究者であり、その知見が彼女の作品世界に力強いリアリティを与えている。学会HP（<http://www.jasca.org/onjasca/award/award.html>）は受賞の理由として、二足のわらじを履く氏のこれまでの活動が「文化人類学の知と想像力を表現」するものとして比類ないことを挙げている。

大学や研究（者）に対して社会貢献を求める声が喧しい昨今であるが、このようなかたちで知を還元する人もある。（S）